

武蔵野日曜聖書講筵

わがキリスト

——詩篇62篇——

1995年11月19日

小池辰雄

詩篇と預言書 主さま、アーメン！ 神交 身入 わがキリスト 上からたまわる 地上は未完成 キリストはわが避所 全部それが御破算 愛は神より 十字架と聖霊 我は火を投ぜん 戦いの世界 神の下において 死んでも死なない 聖書より楽しい本はない 霊的生命こそが宝

【詩篇62】

エドトンの体にしたがいて伶長にうたわしめたるダビデのうた

1 わがたましひは黙してただ神をまつ。わがすくいは神よりいづるなり。

2 神こそはわが磐わがすくいなれ。またわが高き櫓にしあれば我いたくは動かされじ。

3 なんじらは何のときまで人におしせまるや。なんじら相共にかたぶける石垣のごとく揺ぎうごける籬のごとくに人をたおさんとするか。

4 かれらは人をとうとき位よりおとさんとのみ謀り、いつわりをよろこび、またその口にてはいわい、その心にてはのろう。

5 わがたましひよ、黙してただ神をまて。そはわがのぞみは神よりいづ。

6 神こそはわが磐わがすくいなれ。又わがたかき櫓にしあれば我はうごかせれじ。

7 わが救とわが榮とは神にあり。わがちからの磐わがさけどころは神にあり。

8 民よいかなる時にも神によりたため。その前になんじらの心をそそぎいだせ。神はわれらの避所なり。

9 実にひくき人はむなしく、たかき人はいつわりなり。すべてかれらを権衡におかば上にあがりて虚しきものよりも軽きなり。

10 暴虐をもて恃とするなかれ。掠奪うをもてほこるなかれ。富のましくわる時はこれに心をかくるなかれ。

11 ちからは神にあり。神ひとたび之をのたまえり。われ二次これをきけり。

12 ああ主よあわれみも亦なんじにあり。なんじは人おのおのの作にしたがいて報をなしたまえばなり。



●詩篇と預言書

私は病気をして寝ていたときに詩篇を読んで、非常に慰められ力をいただいた経験をもっています。そんなことから私は詩篇が好きになった。ルターが、

「詩篇は聖書の縮図である」

と言いました。詩篇の中には旧約から新約までのすべての真理がその中に含まれている。ただ、詩篇というのはこちらからの願い、祈り、感謝であります。神さまの側からの言葉として直接にきているのは預言書です。アモス、ホセア、イザヤ、エレミヤという旧約の預言者たちです。新約にくると何といつても、四福音書――マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ――が新約の中心です。キリストの言と業ことばわざです。

とにかく、聖書は楽しい本です。聖書が楽しくなければ本ものにならない。

「これはどういう意味だ」

とか、

「難しい」

とか言っているうちはダメです。聖書の言葉の或るところに自分が非常に響く、感激する。そういうところを中心にして段々広がつていく。註解書なんか要らない。イエスが、

「聖書は我につきて証しするなり」

と仰つたのは、いうまでもなく旧約聖書のことです。特にキリストが愛読されたのはやはり詩篇と預言書です。何といつても、旧約の預言書と詩篇、新約の福音書が一番中心になるものです。聖書を楽しく読んでいると力がくる。意味ではない。響きの世界です。キリストの直弟子たちも、イエス自身も、旧約の預言書・詩篇を非常に力とし、愛読したわけです。もちろん、言い伝えて文字になってないものもある。それは日本でも同じことですが、みな言い伝えてもつて覚えてしまうわけです。

●主さま、アーメン！

それでは62篇に入ります。

エドトンの体からだにしたがいて伶長うたのかみにうたわしめたるダビデのうた

ダビデ自身が歌った歌はどれだけあるかは、学問的にも結論はでてこない。ダビデは楽隊の指導者であつた。これは歴代志略上16章を見ると、そのことが分かります。「エドトン」というのはダビデの楽隊の指揮者の名前です。「伶長うたのかみ」とはその楽長です。ダビデというのは猛獣を平伏させてしまったような凄い勇者であつたらしい。王きまでもあつた。

「わがたましひは黙もだしてただ神をまつ。わがすくいは神よりいづるなり。

これは素晴らしい言葉です。

「わが魂は黙つて神さまをまつている」

という。祈りの一番深いのは言葉にならない。それは沈黙のすがたになる。祈りは、



「主さま、キリストさま!」

と、もうそれだけで祈りなんです。言葉がでてこない。もうキリストの名を呼べば、それで感謝もお願いも希望もみな「主さま!」という一言の中に入ってしまう。あとは「アーメン」だけ。だから、

「主さま、……アーメン!」

というのが一番簡単な、そして内容の無量な祈りです。そういう単純な境地に最後にはなる。相対的な現実がどうであろうと、そんなことは究極の問題にならない。そうすると、キリストはいいように導いてくださる。助けてくださる、示してくださる。

だから、我々一人ひとりが、

「わがキリスト!」

と――「キリスト」の上に「わが」がついている――

「私のキリスト」

ということが、誰でもが本当に魂の底から言えなければ、本当の「神交」ではない。

●神交

私は「しんこう」という言葉は「信仰」とは書かない。「神交」と書く。キリストはわが神ですから、神さまとの交わり、キリストとの霊的な交わり、これが神交です。神・キリストと我との縦の関係が立たなければ、いくら

「信仰がどうのこうの」

なんて言ったってダメです。

「自分の信仰がどうだこうだ」

と、いつも問題になっているのは「信仰」なんだ。

「私は信仰なんかありません。キリストに圧倒されているだけです」

と、私はハッキリ言います。自分の信仰なんていうものは問題にしてない。

「キリストに圧倒されて生きています」

と、それだけののはなしです。このキリストの圧倒の力はもの凄い力を持っている。また、その愛はもの凄い愛である。行き詰まりをしらない。そういう深い消息をもたなければ、私はキリスト者とは言えないと思います。

●身入

キリストは、

「父よ!」

だけで祈りなんです。キリストは父の中に、祈ると同時に入ってしまったている。我々は「主さま!」と祈ると同時にキリストの中に入ってしまう。こっちから仰いでいるのではない。



中へ入ってしまう。「信入」、信じ入る。いや、実に身体で入ってしまう、全存在で入ってしまう「身入」です。この身入が本当なんです。全存在でキリストの中に入ってしまうと、もう力が来てしまうがない、ありがたくてしまうがない。相対的現実がどうであろうと、そんなことはもう問題でない。人にどう思われようと構わない。どう取り扱われようと構わない。

キリストは神一切であつた。だから、私はキリストのことを

「無者」

だと言う。神さまの他に何も無い。自分も無い。

「無者キリスト」

です。

近代の日本のキリスト者の第一人者は、私は文句なしに賀川豊彦だと言います。キリストの僕として本当に生きた人は賀川さんです。どん底の人を相手にして、本当に生涯をキリストの愛をもつて貫いた人です。アメリカでは賀川さんはよく知られているらしい。

皆さんお一人ひとりがどなたでも、

「その人でなければ」

という存在なんです。一人ひとりが掛け替えのない方々です。キリストにあるところの兄弟姉妹です。「先生」なんてものはない。みな私たちはキリストの僕です。先に生まれ、たという意味なら、先生というものはあるけれども、いわゆる先生なんてものはない。無者です。

●わがキリスト

詩篇62篇に戻ります。

「わがたましひは黙してただ神をまつ。」^{もた}

沈黙の祈りで神さまを待っている。

わがすくいは神よりいづるなり。

「わが救はキリストよりいづるなり」

ということ。旧約で「神」と言つたつて、我々はその後にはいつもキリストを思っていないければダメです。ルターは旧約をやはりそういう角度で読んでいた。彼自身がそう言つてます。

「救主」というのはキリストのことですから、我々一人ひとりが、

「わがキリスト」

と言えなければダメなんです。三人称的に「キリスト」と言つたつてしまうがない。「わがキリスト」と二人称でキリストに呼びかけている。また、キリストから呼びかけられている。

神こそはわが磐わがすくいなれ。

「キリストこそはわが磐わがすくいなれ」



ということ。

またわが高き櫓にしあれば我いたくは動かされじ。

動かされたって、

「いたくは動かされない、大丈夫だ、揺れたって大丈夫だ」

と。この頃の建築はどんな地震があっても倒れない構造にできるようになったそうだね。

3 なんじらは何のときまで人におしせまるや。なんじら相共にかたぶける石

垣のごとく揺ぎうこける籬のごとくに人をたおさんとするか。

ちやんとここに書いてあるね、ダメだよと。

4 かれらは人をとうとき位よりおとさんとのみ謀り、いつわりをよろこび、

またその口にてはいわい、その心にてはのろう。

とんでもないと。

●上からたまわる

5 わがたましひよ、黙してただ神をまて。そはわがのぞみは神よりいづ。

この5節なんかもいい言葉だ。「黙してただ神をまて」の「待つ」という字はヘブライ語では「依り頼む」という意味です。神に「信頼する」ことです。ただ待っているのではない。

わがたましひよ、黙してただ神をまて

沈黙の祈りで、ただキリストをまつ、キリストに信頼する。

そはわがのぞみは神よりいづ。

「のぞみ」というと、こつちからの望みと思うけれども、実は望みは上からたまわるんです。だから、

「わが望みは神よりいづ」

と、キリストからやってくる。希望は賜りたる希望です。こつちからの願望という。希望はたまわりたるものです。キリストから希望がくるのだから、この希望はくずれない。必ず成就する、たまわりたる希望です。現実には躓いたり転んだりダメになったりという相対的現実であっても、決してそれでお終いにならない。必ず成し遂げられる。

●地上は未完成

シューベルトの未交響楽というのがある。未完成だけれども、その質は完成なんだ。我々の生涯は誰でも未完成です。

「これで完成しました」

なんていう生涯はかえってお気の毒な生涯です。次の世界に続いている。来世でもってそれが本当の完成にくる。地上は未完成が本当なんだ。ゲーテの偉大な詩もダンテの『神曲』も、あれはみな完成している。完成しているけれども本当は余韻がある、「完成ではないよ」と。



余韻をもたないような完成ではダメなんです。ミケランジェロはその彫刻を、最後はノミを落としてしまった。最後の一つは書かない、やらない、作らない。

キリストの生涯は30歳そこそでお終いになったけれども、あれは先へいつてどんどん続いているんです。今もなお天上で生きておられる。

「我はアブラハムよりも先にありしなり」

とイエスは言ったでしょ。霊的な存在としてはもう、いわゆる被造物よりも先にいたんだと。新天新地がくるまで待っている。霊的な新天新地の最後のところは、やはり中心はキリストである。そのことはダンテも書いてます。

キリストの一番近い回りに誰がいるかというと、幼児おさなごです。キリストは幼児を愛したから。

「わが愛する幼児の一人をもあなどる者は石臼うすでもって海に沈められる方がかえってよろしい」

という言葉があるでしょ、小さい者をいじめたり侮あなどつたりしたらダメだと。

●キリストはわが避所

5……そはわがのぞみは神よりいづ。

とはいい言葉だね。望みは私のものではない。神さまからやってきた。キリストからやってきた。

6 神こそはわが磐いわわがすくいなれ。又わがたかき櫓やぐらにしあれば我はうごかさ

れじ。

ルターの「Ein feste Burg ist unser Gott.」(われらの神は堅き城なり)という讃美歌は詩篇62篇のこの言葉からきている。われらの神は堅牢な櫓やぐらであるという。風が来ようが何があるうが倒れない。これはダンテの『神曲』の煉獄篇の始めの方(第三歌)にでている。

7 わが救とわが榮とは神にあり。わがちからの磐わがさけどころは神にあり。

こつちからではない。神さまの方から救う。栄光も神さまからくださる。

「ちからの磐 わがさけどころ」

とはキリストです。キリストはわが避所さけどころ、避難所です。キリストの中に入っていけば、どんなサタンもかなわない。サタンと直接に我々が戦ったら、サタンにやつつけられる。キリストの中にはいつていけば、キリストがサタンをやっつけてくださる。

「サタンよ、退け!」

という言葉があるでしょ。サタンというやつは人を分裂させるやつなんです。

8 民よいかなる時にも神によりたため。その前みまえになんじらの心をそそぎいだ

せ。神はわれらの避所さけどころなり。

9 実げにひくき人はむなしく、たかき人はいつわりなり。

なにか両方ともダメなようだね。ところが、「ひくき人はむなしく」ということは、本当に



低い人はむなしい。「むなしい」というのは、

「何ものでもない」

ということ、いわゆる虚無の意味ではない。この「むなしく」という訳がちよつとま
くない。「たかき人はいつわりなり」とはそのとおりです。

すべてかれらを権衡^{はかり}におかば上にあがりて虚^{むな}しきものよりも軽^{かる}きなり。

この「虚しきもの」とは「ひくき人」のこと。ひくき人の方が重くて、いわゆる誇り高ぶ
っているような高き人は軽いという。それは、私の言葉でいえば、「無者」なんです。無者
であれば、即、無限無量な内容がやってくるから、比較にならない。

「私は信仰なんかありません」

と言うと、みな何事かと思うだろうね。

「キリストの力に圧倒されているだけです。自分の信仰がどうだなんて考えていま
せん。何もありませんよ」

と。

「キリストの力に、愛に圧倒されている」

という、この告白は、この意識は体験しなければわからん。これはどうしても発表する必
要があるね。いっぺんテレビで一席したいくらいだよ。

●全部それが御破算

「キリストは我らの避^{さけ}所なり」

「神は」は私たちにとつては「キリストは」です。複数の「われらの避所」はまず単数で「わ
が避所」です。

「キリストはわが避所なり」

ということ。これはいい言葉だね。避難所です。我々はすべつたりころんだりする。けれ
ども、キリストの中に入っていくと、全部それが御破算になってしまふ。これが避所です。
悪いやつに追いかけてくると、修道院の中に入ってしまう。あれが避所なんです。修
道院の中には人が入ってくることはできなかったからね。日本でいうと、お寺さんだ。

人の悪も自分の間違いも全部、キリストの中に入っていくと、それはキリストがいいよ
うに処理してくださる。それが避所です。

どんな時でも神によりたのむ。調子のいい時には、神さまはなような顔をしているけ
れども、冗談じゃない。調子のいいも悪いもありはしない。大事なのは神に信頼すること
だということです。

神さまはつかまえようとしているから、その神さまに捕まることだ。神さまの手に、キ
リストの手に捕まえられるんですよ、こつちが。願ひよりも先に、恵みの力の方がちゃん
と先にきている。お願いしたからやつてくださるのではない。小さな子供が「おかあちゃー



ん!」と言って、お母さんと呼んでいるよりも先に、お母さんの方でちゃんと迫ってきている。そういうわけです。

●愛は神より

ヨハネ第一書の4章7節からが大事です。

「⁷愛する者よ、われら互いに相愛すべし。愛は神より出づ、おおよそ愛ある者は、神より生れ、神を知るなり。

この「知る」という言葉は、頭で知る意ではない。全存在で受けとることを「知る」という。

⁸愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。

「神」は「キリスト」と言い換えたつていい。

⁹神の愛われらに顕れたり。

キリストにおいて顕れた。

神はその生み給える独子^{ひとりご}を世に遣し^{つかわ}、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る^よ。

これが神さまの愛の内容だというんです。

¹⁰愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥^{なだ}めの供物^{そなえもの}となし給いし是なり^{これ}。

この10節はハッキリしている。

¹¹愛する者よ、斯^{かく}のごとく神われらを愛し給いたれば、我らも亦^{また}がいに相愛すべし。¹²未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在^{いま}し、その愛も亦われらに全^{まつ}うせらる。¹³神、御霊^{たま}を賜いしに因りて我ら神に居り、神われらに居給うことを知る。」(ヨハネ14・7〜13)

これは聖霊です。これは大事なことです。

●十字架と聖霊

「自分は地に火を投ぜんために来た」

と、キリストがルカ伝12章で言っている。

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて来^{きた}れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。」(ルカ12・49〜50)

「受くべきバプテスマ」とは十字架のこと、「火」とは聖霊のことです。

「聖霊を投ずるためにやって来たのだけれども、まず自分は十字架に架かつて贖罪をしなければ、聖霊をお前たちに与えるわけにはいかない」

というわけです。だから私は、

「十字架と聖霊は分けてはいけません」



と言っている。十字架が土台ですから。贖罪がキリストの十字架です。罪のために、我々の罪の贖罪のために、キリストは十字架に架かった。そして、贖罪でございましたのではない。それから今度はキリストは復活した。「復活した」というのは、

「霊的な存在に変わった」

ということ、「復た息を吹き返した」ということではない。「復活」という訳は本当はあまり感心しない。キリストは霊的な存在となつて、そして今度は聖霊をくだす。これがキリストの十字架と、天界の霊的な復活です。アブラハムよりも先にあって、それから新天地がくるまで、今でもキリストは霊界で霊的存在として生きておられる。キリストの霊的生命というのは大変なものだ。

●我は火を投ぜん

我々は烈々たる火の如く――キリストが、

「我は火を投ぜんとて来た」

と仰った――この聖霊の火をもって戦つていくんです。

キリストは、

「十字架に架かつて、復活して、そして聖霊を与えるぞ」

という。

「十字架・復活・聖霊」

ということになっている。キリストの生命を賭けての恵みというのは大変なものです。そういう意味で我々一人ひとりが

「わがキリスト」

ということをはッキリ告白できなければダメです。私は「わがキリスト」と書いたら、これでもう力がきてしまう。キリストの力に圧倒される。これが本当の「神交」という。信じ仰ぐ（信仰）ではない。

「私は信仰なんか問題にしてない。神・キリストの力が上から私を圧倒しているか

ら、私はキリストに圧倒されて生きています」

とハッキリ言います。自分の信仰でなんか生きていませんから。自分の信仰なんか問題にしてない。だから、力が来てしようがない、ありがたくてしようがない。

どうだい？ みんな、

「そうだ！」

と言わないのか。あなた方もそういうことにならなくてはね。いわゆる自分の信仰なんか問題にして何になるか。少なくとも武蔵野幕屋の君たちは私と同じ気合になつていなければ。本当の同じ気合にならないければ、いつでも集会をやめるよ。



●戦いの世界

ルカ伝12章49節は大事な節です。

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

聖霊の火が燃えたらもういいんだと。

⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。

「その前に十字架に私はかかるからね」

ということですよ。これはキリストの大変な言葉ですよ。十字架・復活・聖霊のことがこのたった一節の中に入っている。

⁵¹われ地に平和を与えんために来ると思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反

つて分争なり。」(ルカ12・49～51)

本当の世界といわゆる相対的な現世とは戦いだから、「分争」と言った。

「本当に私を受けとったならば、いわゆる無信仰の者あるいは福音に逆らう者とは戦いだぞ」

と。神との交わりは戦いの世界です。みんな己を神としている自己中心ですから。

●神の下において

いわゆる民主主義はダメなんです。リンカーンはあの民主主義の上に

「アンダー・ゴット」(神の下において)

と言った。我々は神の下においての民主主義なんだ。ところが、

「神の下において」

という意識は日本の民主主義にはない。ダメです。日本は精神的に行き詰まるよ、一番ダメではないかな。まだ韓国の方がもつとクリスチャンが多い。日本は非常に現世的だ。小学校から大学にいたるまで先生方がそういう神、神的な宗教的な境地をもたないから――持っている人はごく少ない――本当の教育はできない。

「教育の中で宗教を語ってはいけない」

という。語らなくなつていい。先生がその境地にいれば自ずからそれが響いてくる。日本の精神状態は情けない。あなた方、憤慨しなですか。ドイツでもアメリカでもとにかく歴史的な伝統を、キリスト教の信仰の世界を持っているから、どこかやはり違う。日曜はちゃんと教会をやっている。日本の教会の牧師さんたちは本当に戦闘的にやっているかね。

「キリスト教思想」なんていう本がある。冗談じゃない。キリスト教は「思想」ではありません。「教」でもない。キリスト道です。教えではない。「教えた」というと、

「どんな教えか」

なんて思う。これは道だ。自分で歩いてみなければわからない世界です。キリストと一緒に



に歩いてみなければわからない世界です。

「この人を見よ」(ヨハネ19・5)

という言葉がある。これは訳が間違っている。あれは

「見よ、この人だ。これは大変なひとだよ」

ということですよ。

●死んでも死なない

ヨハネ伝17章のところは素晴らしい。

「イエスこれらの事を語りはて、目を挙げ天を仰ぎて言い給う『父よ、時来^{きた}れり、子が汝の栄光を顕^{あらわ}さんために、汝の子の栄光を顕したまえ。

これは十字架に架かることです。

²汝より賜^{たま}わりし凡^{すべ}ての者に、永遠の生命を与えしめんとて、万民を治むる

権威を子に賜いたればなり。」

全くそうですね。世の終りまで、新天新地がくるまでキリストは霊的なキリストとして本当の生命の世界を与えている。死んでも死なない世界です。

私は「死ぬ」という言葉は嫌いだ。往生する、あちらの世界に往きて生きるんだ。あちらの世界に往きて生きるその姿は霊的な身体、霊体です。肉体ではない。これはパウロがちやんとそのことを言っている。

●聖書より楽しい本はない

聖書より楽しい本はない。あの大詩人ゲーテも

「聖書一卷にかなう本はない。聖書はいかなる本よりもけたが違つ」

と言った。ご飯を食べることを忘れても、聖書を読むことを忘れてはダメなんだ。読まないではいられない。力がくるから。聖書を読まないでいると力がなくなってしまう。意味の世界ではない。力の世界、光の世界、生命の世界です。私は或る時期には電車の中で聖書だけを読んでいたね。

旧・新約聖書は大変なものだ、特に新約は。新約というのは無駄な頁が一頁もない。旧約には歴史的な少しややこしい所があるけれども、新約聖書というのは凄い。これはやはり神の筆で書かしめられた本だ。

あの「信仰、信仰」と言ったルターが、ヤコブ書の中に行為のことが書いてあるから、

「ヤコブ書は藁の書翰だ」

と言った。あれはルターの大間違い。そうではない。ルターは「信仰」に少し凝り固まってしまった。新約聖書には「藁の書翰」なんかない。皆さん、聖書を楽しんでください。

仏典でも聖書でもいいから、宗教的な世界を今の教育者たちが自分で読んでそういう世



界をもっていなかったら、教育はなりたない。私は大学で遠慮なしに聖書のことを語った。
「ヨーロッパの文学の源泉は聖書だから、聖書を読まなければ分からないぞ」
とハッキリ言った。

「聖書を持っている者は手をあげろ」

と言ったら、持っている者はほとんどいない。ヨーロッパ文学の根底は聖書だから、「文学、文学」なんて言ったって、聖書を読まなかったら、本当の味が分からない。ゲーテの『ファウスト』にしろ、ダンテの『神曲』にしろ、ユゴーの『レ・ミゼラブル』にしろ、ミルトン、ブラウニング、何にしろ全部、向こうの偉大な文学は聖書が土台です。あなた方も遠慮なく言ってやりなさいよ。

●霊的生命こそが宝

「⁵²今より後、一家に五人あらば三人は一人に、二人は三人に分かれ争わん。

⁵³父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、^{しゅうとめ}姑は嫁に、嫁は姑に分かれ

争わん」(ルカ12・52～53)

なんて、凄いことが書いてあるね。

「本当の真理はそれを受けとるか受けとらないかでもって、気持ちが別れてしまうぞ」

と。キリストは遠慮なくこういうことを語っている。だから、キリストは、ある意味において嫌われるんです。

「ずいぶん烈しいことを言うな」

なんて。これはいわゆる教えではないから。ルカ伝12章32節、

「³²^{おそ}懼るな小き群よ、なんじらに^{みくに}御国を賜うことは、^{みこころ}汝らの父の御意なり。

³³汝らの^{もちもの}所有を^{ほどこし}売^りて^{ほどこし}施^し済^しをなせ。己がために^{ふる}旧^いびぬ^ふ財^{ざい}布^ふをつくり、^{たから}尽^つきぬ

³⁴財^{たから}宝^{たから}を天に貯えよ。かしこは^{ぬすびと}盗人も^{むし}近づかず、^{やぶ}蟲も^{やぶ}壊^{やぶ}らぬなり、³⁴汝らの財

宝のある所には、汝らの心もあるべし。」(ルカ12・32～34)

我々は天に宝を積む。我々の霊的生命そのものが何よりの宝です。いわゆる信仰ではない。霊的生命です。

私は大学でも遠慮なく言っただけでも、学生は大体、聖書を買って読まない。なにかいわゆる修養の本だと思っている。聖書というのは修養の本ではない。霊的生命の原動力をもつ本だから、これは自分で読んで、自分で歩いてみなければ納得できない世界です。意味を考えて分かるような世界でないから仕方がない。

「来たりて見よ、来たりて読め」

という世界です。どうぞ、皆さんも、そういう角度から大いに福音のために戦ってください。

